

吉井 久氏 タオル製織技術者・吉井タオル(株)創業者

戦後の今治タオル工業の発展を支えてきた産地を代表する技術者であり、1996年に愛媛県知事賞、1998年には藍綬褒章を受章。また、タオルの素材からデザインに至るすべてにこだわりをもち、つねに新しい挑戦をしつづけている吉井タオル(株)の創業者でもある。タオル製織をはじめた1950年から二代目吉井智己氏が同社代表取締役社長に就任する1999年まで、およそ半世紀に渡ってタオル製織に身を捧げてきた、いわば「タオルの虫」である。




吉井久氏




よしい・ひさし ☆ 1930年、越智郡下朝倉村古谷字原山(現・今治市古谷)生まれ。1946年3月、愛媛県立今治工業学校機械科を卒業し、同年4月に広島県福山市の御野製作所に入社。1948年11月に新居浜市の愛媛鋳工(株)に移り、機械工としての技術を徹底的に学ぶ。1950年4月、今治への帰郷を機に新興織物(株)に入社し、タオル業界へ入る。1957年3月、吉井タオル工場を創設し、独立。1967年吉井タオル(株)に改組し、同社代表取締役社長に就任。1993年4月から1996年5月まで四国タオル工業組合理事長、および1996年5月から1998年5月まで日本タオル工業組合連合会理事長を歴任。現在は、第一線を退き、吉井タオル(株)相談役として後継者の成長を見守る。

1. 幼・少年時代

家族を支えるために、今治で働くことを決意

吉井久氏は、1930年に越智郡下朝倉村古谷字原山（現・今治市）という、周辺を梨農園に囲まれた当時10軒ほどの家が集まる小さな村落で生まれた。父親は菊間瓦  の職人で自営業を営んでおり、吉井氏は10人兄弟姉妹（7女3男）のうち8番目の次男であった。長姉の誕生が1910年（明治43年）、長兄が1922年（大正11年）で歳がずいぶん離れていたこともあって、上の兄姉には可愛がられた。

1940年、吉井氏が下朝倉高等小学校5年生のときに、一家は現在吉井タオル(株)の本社がある今治市町谷に引っ越しをしたため、翌年の4月から富田高等小学校の6年生に転入した。転入して間もない同年8月に父親が急死し、父親の自営業を継いで瓦職人になる予定であった長兄が、当時勤めていた別子銅山を辞めて帰郷することになった。ところが、1929年の世界恐慌を引き金とした長引く不況によって、世界の国々は混沌とした時代へ突入していった。日本は1937年に中国との間で戦争を起し、その後国を挙げての総力戦に発展した。そして、1941年にはじまった太平洋戦争で長兄は戦場へ赴き、終戦を前にして悲しい結末を迎えることになった。

夫を失った母親は、53歳のときに菊間瓦の看板を降ろし、生計を立てるために縄を編むための機械を3台購入して、稲を原料に縄の生産をはじめた。1942年のことである。この年の4月、吉井氏は、手に職をつけることを考え、設立されたばかりの今治市立工業学校  の機械科に1期生（1学級49名）として入学した。「タオルびと」のひとり目としてとり上げた尾崎今男氏（「タオルびと」2012年12月号～2013年3月号参照）も同校の出身であり、吉井氏の後輩にあたる。戦争のさなかであったため、機械科といえども軍事教練や勤労働員の活動にいそしみ、学校では機械に関する専



門的知識の習得はできなかった。その代わりに、勤労働員の仕事で今治の鉄工所で内燃機関などの生産に従事し、ここで機械の基礎を学ぶことができた。

そして、1945年8月5日、今治のタオル工場に甚大な被害を与えた今治空襲をへて、8月15日にようやく日本は終戦日を迎えた。1946年3月、吉井氏は愛媛県立今治工業学校を無事卒業したが、入学した当初1学級49名いた同級生は、戦争をはさんで卒業時には4年制33名と5年制13名の二つわかれ、戦争で3名の犠牲者を出した。

卒業後、吉井氏は広島県福山市の御野製作所という鉄工所に入社することになった。御野製作所では船のスクリューなどの大型機械の部品生産にたずさわっていたが、兄の戦死の公報が入ったため1948年8月に今治にいったん帰郷する。機械いじりの技術を生かして、地元の鉄工所の紹介で新居浜市の愛媛鑄工(株)に縁があって入社した。ここではドビー機を生産した。しかし残念なことに、1949年末に愛媛鑄工が廃業に追い込まれた。吉井氏は、仕方なく退職することになったが、この先の身の振り方を考えて、家族を支えるために母親のいる今治に帰ることを決意した。

2. タオルとの出会い



新興織物に入社してタオルと向き合う、これも縁や

1950年2月、帰郷した吉井氏は、職探しをはじめた。ある日、新聞に新興織物(株)の求人広告が新聞に掲載されており、ふと目に留まった。新興織物は、ラペット織  の輸出用ショールヤシマグ(刺繍織物のターバン)や、ダマスク織  のテーブルクロス、ドメスティック(厚手の刺繍織物)を製造していたメーカーで、当時は東洋紡績(株)の委託生産をおこなっていた。1950年代に入って輸出量

が徐々に減少したため、1952年頃からラペット織の余り糸を使ってタオル生産にも着手するようになった。その際、先行していたタオルメーカーから来た職人や新人の技術者が入社したおかげで、既存の織機をタオル用に改造して本格的なタオル生産へ移行できた。

吉井氏は、さっそく知人の木工所社長に求人広告の話をしたところ、新興織物が木工所の取引先でもあったことから、社長をとおして新興織物の工場長と面談する運びとなった。その結果、ちょうど工場を新設しているところで技術者を必要としていたこともあって、吉井氏は1950年4月から新工場の技術者として着任が決まった。新工場は、織機50～60台の設備が収容できる立派な^{のこぎりば}鋸齒屋根工場であったが、入社当初は村秀鉄工所のラペット用織機26台が組立てのさなかで、床などの内装も未完成のままであった。現場の社員は、吉井氏を含めて10名程度であった。

入社直後の仕事は、工場内の整理や雑用にくわえ、織機を組立てるための準備機械(ワインダーおよび整経機)の据付けの手伝いをしていた。ラペット用織機26台が運転を開始する頃には、ラペット織についてはある程度仕事ができる程度に技術をマスターした。輸出用ヤシマグが好調であったため旧工場から24台の織機が移設されてきか、前述のように1951年半ば頃から輸出量が減少してきたので、新興織物ではラペット織やダマスク織の余り糸や特殊系(ガラ紡糸)を使用したタオルの生産に移行した。

ちょうどこの時期にタオル製織やジャカード製織に長けた技術者が入社し、吉井氏を含めた技術者たちは既存織機をタオル用に改造したり、地元の村秀鉄工所や矢原鉄工 、青葉鉄工所などへ新たに発注されたタオル織機を組立てたり、機械と格闘する毎日を送った。吉井氏の工業学校時代の後輩にあたる尾崎氏も、吉井氏より少しまえにおなじく技術者として同社に入社しており(「タオルびと」2013年1月号参照)、新興織物では若い技術者たちが集まっていた。のちに、吉井氏も尾崎氏も独立して自社工場をもつことになるが、新興織物からスピアウト  していった技術者が何人かいた

ことを考えると、今治タオル工場の発展において新興織物の果たした役割は大きいといえる。



新興織物入社時代

右が吉井久氏、左が尾崎今男氏

（写真：吉井久氏提供）



右が新興織物社長、左が吉井久氏

（写真：吉井久氏提供）

新興織物は、ヤシマグやドメスティックなどの刺繍織物から本格的にタオル生産へと転換し、短期間のうちに合計70台のタオル織機を工場に設置することに成功した。しかし、タオルの本格的な生産がはじまると、準備機械の不足や整経系のテンションにおける不均一などの問題が起こった。とくに、テンションの問題は、当時の整経機やクリールがボビン用であり、整経時の巻糸テンションの均一化は困難であったからだ。そこで1953年頃に、東洋紡績の傘下にあったタオルメーカーの三重繊維（四日市市）を訪問し、最先端の引抜き式クリールや整経機の停止ブレーキなどをスケッチさせてもらった。このスケッチをもとに、地元の青葉鉄工所で整経機の改造やクリールの製作を依頼し、準備工程の品質や効率の改善にとり組んだ。こうして、新興織物は、製織工程のみならず準備工程から自社で生産するようになった。（次号につづく）